

グリザイアの幻影

unknownname

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「シヨータムだ!!」◆東京での保護観察期間を経て、解放された雨宮連は私立「美浜学園」へ転校する。彼に訪れるのは、待ち望んでいた「平穏な日常」か、それとも「混沌とした日々」なのか。転校して早々、彼は前者が叶えられないことを痛感する。訳アリ少女に囲まれ彼に、再び「主人公」としての自覚が芽生え始める…。◆投稿頻度遅めですがお許しを…。誤字脱字当は、注意しておりますが、もしありましたらご指摘お願いします。感想も、軽い物でも大変嬉しいので、お願いします!!

※悩んだ末に、r18タグを付けさせて頂くことにしました。性的な描写が苦手な方はご遠慮ください。

目次

序章 “怪盗団” 復活

1.	l e t u s s t a r t t h	1
2.	s t a r t t h e g a m e	5
3.	w a k e u p	11
4.	出 会 い	16
5.	カ ッ タ ー ナ イ フ	24
6.	s o m e o n e i n s i d	29
7.	l o s t s o m e t h i n g	35

8.	l o o k o u t !	41
9.	P h a n t o m T h i e v e s	45
10.	d e m a n d	50
11.	l i t t l e	53
12.	悩 み	59
13.	天 音 の 告 白	65
14.	彼 女 と 、 会 社	71
15.	コ コ ロ の 怪 盗 団	75
16.	デ リ ヘ ル ゴ ッ コ	80
17.	答 え	86
18.	W h i c h s i d e i s	92
	d a r k n e s s o n ?	

第一章 榊 由美子

u
r
l
i
f
e
|
99

l
9.
y
o
u
r
c
h
o
i
c
e
y
o

序章 “怪盗団” 復活

1. let us start the game

『目的地に到着しました』

ナビアプリの機械音声が、学園への到着を告げる。徒歩で来るには遠すぎた、と今更ながら後悔するその“青年”は、スマートフォン画面から顔を上げ、周囲を確認する。駅周辺とはかけ離れた“無機質さ”に驚きつつも、物悲しさを覚えた。

「——あの……どなたでしょうか？」

予想だにしない人の声に驚いた青年は、ハツとして声の主を探す。校門の格子扉の向こう側にいる“女性”……恐らくそれが声の主だろうと青年は気づく。そして、その女性の不安げな表情にもしつかりと気づいていた。

彼女の不安を拭うため、青年はできるだけ簡潔に自己紹介をした。

「あ、転校生の方でしたか……ごめんなさいね、てつきり……何でもないわ！今、門を開けるわね……」

誤解が解けたらしく、格子扉がギイと音を立てて開かれる。その時、青年の頭を過る“ベルベットルーム”の光景……。恐らく格子扉から連想したんだろうと、青年はどこか

懐かしさを覚えながら、彼女の後に続いて “私立美浜学園” の敷地へと足を踏み入れた。

——学園長室

「あ、座つていいわよ」

彼女…もとい、美浜学園学園長「橘 千鶴（たちばな ちずる）」は、ドアの前で突っ立っている青年を座るように促す。もちろん、学園長の配慮を無下にする訳にもいかないと、青年は素直に応じる。

「えーと…転校生の『雨宮 蓮（あまみや れん）』君で間違いないわね？」
青年…ではなく蓮は静かに頷く。

「改めまして…ようこそ、美浜学園へ！」
千鶴の歓迎に、蓮は表情を曇らせる。それは、千鶴のソレではなく、彼の中からふつふつと湧き上がるいくつかの “疑問” からくる表情だった。

「…質問がある」

「どうして？」

「まず一つ。俺以外の生徒の姿が見えない…これはどういうことだ？」

「それは…少数精鋭だからよ」

「少数…？」

「そう、学生は貴方をいれて六人だけなの」

丁寧な説明でも、蓮は腑に落ちない様子だった。それもそう、彼の見てきた学校と言うのはもつと人気がある所。それにここは一応「海沿い」。ド田舎でも無いのに、さつき言われてた生徒数では彼女の説明あつても腑に落ちないのは仕方ないことだった。が、蓮はいちいち小難しいことを考えるのは止めようと、思考を停止する。

「そうだ、後で学生寮に案内するわ。そこから通つてちようだーい。質問は以上かしら？」

いや、これで終わりではない…が、蓮はあえてその質問を心の奥に押し留める。無論、それを聞く「度胸」は十分にあるが、彼の「慈母神」並みの「優しさ」がそれを拒んだ。そう、「自分のような」「前科者」が入れる学校のことだから、ここは訳アリなのだろう」という質問を。

蓮は胸につつかえる「違和感」を拭いきれないまま、千鶴の後に続いて学生寮へ向かった。

4 1. let us start the game

2. start the game

「着いたわ、ここが学生寮よ」

千鶴に連れられ、蓮がたどり着いた場所には小奇麗な建物があつた。三階建て、壁は真つ白で清潔感があるが、窓のデザインはモダンだ。

「それじゃあ、早速入りましょうか」

ガラスの扉を押し開け、入ってすぐのところを下駄箱。その横に、恐らく寮生の名前であろうものが羅列されたボードに、“在籍” “外出” を知らせる木札が下がつたものが壁に備え付けられていた。そのボードから伺えるに、すべての寮生は今ここにはいないようだった。

「お風呂とトイレと…キッチンもあつて家具も一通り揃つてるから…」

そう言いながら、千鶴は一番手前の部屋へと入つていつてしまった。連もそれに続くうと、靴を脱ぐ。が、背後の気配に気が付き、そつと後ろを向く。するとそこには、メイド服姿の女の子が不安そうな顔で立っていた。一体誰だと聞こうとしていた蓮だが、先手を打たれる。

「あなたは今日到着予定の転校生さんですか？それとも… “不審者さん” ですか…

「？」

「——どうも、今日からお世話になります。『不審者』です」
そう言つて、蓮は怯えるメイドの目の前にすつと手を差し出す。

「あ、ど、どうも……」

連のユーモアと、『魔性の男』と呼ばれるほどの『魅力』が、彼女の警戒心を和らげる。二人は握手を交わすと、互いにつこりと笑い合つた。

「……本当は『雨宮連』だ、よろしく」

「っ！」

一瞬、彼女は手を放しびつくりした様子だったが、再びにつこりと笑う。

『小嶺 幸（こみね さち）』です。よろしくお願ひします」

メイド服姿……連は東京での思い出を巡らせる。通つていた学園の担任、『川上』のメイド服姿を幸を見て思い出したのだ。幸と川上の違いと言えば、断然『年齢』だ。やはり、幼い少女のメイド服姿は、どこか心を揺さぶられるものがある。と、蓮は一人で見じみと思つていた。

「あゝ小嶺さん！丁度良かった、こちらが今日転校してくる……」

「——雨宮連さん、ですよね？」

「あら、もしかして知り合い？」

幸はさつき蓮から自己紹介をされたことを事細かに伝える。

「そうだったのね。でも、不審者って名乗っちゃだめよ」

「すまない、ちよつとしたジョークのつもりだった」

蓮がそう言つて申し訳なさそうな顔を見ると、千鶴は笑つて「親しみやすくいいわ」と彼を慰める。そして、幸がこの学園の一年生であることを伝える。もちろん、蓮が三年生であることも幸に伝えた。

そして、蓮に自然な疑問が生まれる。

「そういえば、どうして『メイド服』なんだ?」

一瞬、デリヘルとか性的なサービスを想像した蓮は罪深い…ではなくて、川上はそのサービスのために着ていたから納得できるが、彼女が学園内で着ているのは納得できない。明らかに不自然だ。

「これは…ですね、私はクラス委員を任されているのですが、その関係で先生方の雑用などをお手伝いしていたところ、『なんだかメイドみたいだね』『メイド服着てみなよ』と促され、実際に着てみたらやっぱり似合うから普段から着た方がいいよと提案され…」

「——なるほど、分かった」

蓮は幸の説明に強引に終止符を打つと、眼鏡を中指で押し上げる。

「それじゃあ、ここからは彼女に案内してもらって」

千鶴はそう言う。「またね」と言っ、寮から出ていった。取り残された連と幸はしばらく微笑み合っていたが、しびれを切らした蓮が案内を催促する。

「あ、そうでした。それでは、ご案内します」

先ほど千鶴が入った部屋に二人で入る。内装は、寮とは思えないほどとても綺麗だった。恐らく、ここで生活したらもう「屋根裏」には戻れないだろう。と、勝手に思っていた。「屋根裏のゴミ」と言う看板も下ろさなきゃな、とも思っていた。

「あ、そういえば」

何かを思い出したかのように、幸が突然口を開く。

「あなたのことを、何とお呼びすれば…」

「好きに呼んでいい」

「それでは…蓮くんとお呼びすることにします!」

急接近したなど、蓮。なんだかんだで距離感が掴めない幸。すると、幸は「それでしたら」と訂正する。

「雨宮さん。というのはどうでしょう?」

「いいね。それじゃあ、俺は君のことを幸と呼ぶ」

「幸ですか…」

「気に入らないか？」

「いえ、とんでもないです……これからよろしく願います、雨宮さん！」

蓮は「ああ」と返事をする、握手の代わりに彼女に微笑みかける。それに答えるようにして、彼女も微笑んだ。

しばらくして、幸の居なくなつた部屋はしんと静まり返る。前に住んでいたゴミ：じゃなくて「ルブランの屋根裏」にはモルガナがいたので何かと賑やかだったが、今は完全に一人だ。寂しくないと言えばウソになる。けれど、蓮はそんなことより、モルガナに「おい、もう疲れただろ？」とか「もう寝ようぜ！」とか言われないことが心底嬉しかった。だが、やはり「無い」悲しさも少しはある。

かつての仲間たちと撮つた写真をスマホで眺めながら、ベッドに寝そべる。怪盗団のSNSは未だに残っている。履歴もだ。彼はそれを見返しては、寂しさを紛らわせ、懐かしさを糧に不安に立ち向かつていた。

「竜司、どうしてるかな」

ふと独り言が漏れる。静かな部屋に一瞬木霊した後、遠くの波の音によつてかき消された。

「風呂でも……入るか」

そう思い立つと、蓮は朝に案内された大浴場へと向かった。

3. wake up

「ふう〜…」

湯船につかる。息が漏れるほど風呂は気持ちがいいと、蓮は再確認しながら、パシャつと顔にお湯をかける。前に居候していた「ルブラン」の目と鼻の先にも銭湯があつたが、あそこも良かった。ただ、時間が惜しくて毎日は通えていなかった。けれど今回は、寮に備え付けられていると来た。これならば、毎日通えるだろうと、彼はたまらずガッツポーズを決める。

段々と顔が熱を帯び、視界がゆらゆらと定まらなくなってきたので、蓮は湯船から引き揚げる。そして腰にタオルを巻いたまま、スモークガラスの引き戸を開け、脱衣所に出る。ドライヤーで髪を乾かしたり、髭を剃つたりと備え付けのアメニティを遠慮なく使う。しかし彼のくせ毛はこのブラシだけではどうにもならないようだ。まあ、美容院でストリートパーマを当ててもコレなのだからブラシなんかじゃ到底無理かと蓮は思った。

体を拭き、持ってきたパジャマに着替えると、脱衣所を後にした。

自室に戻ると、既に時計の針が十二時を示している。普通ならとつくにモルガナに強制されてベッドに入っている頃だが、今はその邪魔もない。心置きなく徹夜ができるぞと、思い切りベッドに飛び込み、スマートフォンを開くが、ズシンと意識を奪うような重い睡魔に襲われ、徐々に意識と体が乖離してゆく…。

——これは…鎖…。

不思議な夢を見る。それは鎖が幾多にも飛び出し、絡まり合った謎の青い空間。普通だったただの夢だ、と見過ごすが、彼にははつきりとした見覚えがあった。

——“ベルベットルーム”か！

すべてを明瞭に思い出し、ハツとした蓮が目を覚ましたのは自室…ではなくベルベットルームだった。頭に鈍い痛みを感じながら、冷たく硬い囚人用のベッドから体を起こす。

「またお目にかかりましたな」

聞き覚えのある妙に朗らかな声。彼は頭痛を堪えながら、倒れ掛かるようにして格子扉を掴む。その隙間から見えるのは——“ピノキオ”ではなく、長い鼻が特徴のこの部屋、ベルベットルームの主『イゴール』の姿だった。その横には…青いドレスに身を包んだ幼い少女…彼の部屋の住人『ラヴェンツァ』も凜として立っている。

「再び会えましたね…『マイ・トリックスター』…」

ラヴェンツァは蓮のことを『トリックスター』と呼び、尊敬していた。蓮はその名前に懐かしさを感じながらも、昔とあまり変わらないベルベツトルームの姿に驚いた。が、一つ分らないことがあった。

「——なぜ俺はまたここに訪れた？」

蓮は己の両手に視線を移す。赤い手袋をはめているということは…彼は再び、あの『ジョーカー』の装いをしているということだ。戸惑う連を見つめながら、イゴールは口を開く。

「ベルベツトルームは何らかの形で契約を交わしたお客様のみが訪れることのできる特別な部屋。と言うことは貴方様は再び『どこか』で契約を交わされたのでしょうか」

「契約を…?」

尊敬する人が帰ってきたことに喜びを抑えきれないラヴェンツァはニヤニヤしている。その傍で、蓮は必死に思い当たる節がないか、記憶の引き出しを引つ掻き回していた。が、無い。そこに、イゴールが潤滑油を差す。

「…思い当たらないようですね。私にも詳しいことは分かりません…ただ…」

「ただ?」

「——何か渦巻く強大な『力』が貴方様を引き留めているのやも知れません」

強大な…チカラ？思考に耽^{ふけ}る蓮に、突如として強烈な痛みを伴う「フラツシユバツク」が襲う。その突然の痛みに、彼は思わずその場に崩れ落ち、呻く。その光景を心配そうに見つめていたラヴェンツアが手を差し伸べようとするのを、イゴールが制止する。最初はイゴールの言わんとしていることが分からないラヴェンツアだったが、地面に蹲^{うずくま}る蓮が笑い声を上げたのを聞いて、理解する。

「フフツ…フフ、アハハハハ…！」

軽快な身のこなしで地面を蹴り上げ、一回転した後に再び立ち上がる。その姿には、先ほどの「迷い」も「苦しみ」も一切感じられなかった。片手を己を偽る「仮面」に添え、不敵な笑みを浮かべる。その様子に、イゴールは手を打ち鳴らす。

「おお、以前の調子が戻られたようだな。これはこれは、なんとも「面白い」！」
ラヴェンツアは、ジョーカーの変わらぬ姿を見て、目を輝かせる。

「マイ…「トリックスター」。やはり貴方は、私が見込んだ通りのお方。いつだって、私のトリックスターなのですね…！」

蓮は「クククク…」堪えるような笑い声を漏らすと、手にナイフを召喚し、それを構える。その姿はかつてと何ら変わらない、「怪盗団のリーダー」として仲間を引っ張り、強大な悪に立ち向かってきたコードネーム「ジョーカー」そのものだった。

彼は再びニヤリと口角を上げる。

4. 出会い

「ハハハハハ…ハッ！」

次に目を覚ましたのは自室のベッドの上だった。飛び起きたせいで、思い切り転げ落ちてしまったが、何とか怪我は免れたようだ。が、ベッドから落ちた衝撃による痛みは半端ではなかった。その痛みで目を覚ました蓮は、おぼつかない足取りで冷蔵庫の前までくると、中から水の入ったペットボトルを取り出し、一気に飲み干す。

寝坊とも早起きとも言えない微妙な時間。予め貰っていた制服に着替えると、ベッドに腰を掛け、しばらくクロスワードパズルに勤しむ。それも飽きてきたところに、パズルの本を放り出すと代わりにカバンを拾い上げ、肩にかける。そして、自室の扉を開ける。すると、蓮の視界に赤髪で青い瞳の女の子が飛び込んでくる。

「うわあっ」

一瞬目が合うと、その女の子は驚いてそのまま仰向けに、ドシンと大きな音をたてて倒れた。

「いててえ…あ、あれ、誰…?」

倒れた赤髪の女の子は蓮をまじまじと見つめながら、首を傾げる。すると、どこから

ともなく現れた幼い少女が、倒れている彼女を飛び越え、逃走する。

「あ、こら待てー!」

逃亡した少女を見かけるや否や、さつきまで倒れていたのが嘘かのようにさつと立ち上がり、ブラシ片手に追跡する。そして、逃亡していた少女はロビーにあつたソファに飛び込むと、頭を両手で庇いながら縮こまる。と、そこに追手である赤髪の女の子が飛び掛かり、馬乗り状態になった。

「こらー!じつとしてなさい!」

「あゝ、そんなに強くしたららめえ!」

「らめえって言うな!」

蓮は完全に蚊帳の外だった。彼はしばらく二人のキャットファイトを眺めた後、これではちがいが明かないと自ら二人の前に歩み出る。そして、すつと手を伸ばし、顔に笑顔を貼り付ける。

「雨宮 蓮だ、よろしく!」

馬乗りになつていた赤髪の少女と目が合う。

「あつ…もしかして転校生って君のこと?」

静かに頷く。すると、差し出された手に気が付いた彼女はあたふたと慌ててブラシを置き、素早く手を握る。

「ごめん……えーと雨宮 蓮?……へえ、蓮くんか。私は周防 天音(すおう あまね)、よろしくね蓮くん!」

たゆんと揺れる豊満な彼女の胸に、蓮の視線は釘づけだった。杏の何倍だろうか……ここまで揺れるのを見たのは初めてだ。と、彼は息を呑む。

さっきまで天音に取り押さえられていた少女は、恥ずかしさからか、天音の後ろに隠れる。

「ほーら、『マキナ』。あんたも自己紹介しなさい」

天音がそう勧めるも、『マキナ』と呼ばれる少女は背後でブツブツと独り言を言うだけだった。そこで、蓮は再び手を差し出し、さっきのように笑顔を貼り付ける。

「マキナ……ちゃんかな? 雨宮 蓮だ、これから仲良くしてくれ」

彼の『魅力』のお陰か、独り言を止めてそつと顔を出す。

「う……ど、どうも……」

自己紹介はしたものの、声は小さい。彼の魅力を以ってしても、打ち解けるにはしばらく時間がかかりそうだ。蓮はハアとため息をつく。

「他に何か話すことないの?」

天音がマキナに問いかける。しばらく「うー」と唸りながら考え込んでいたマキナは、やつとの思いで質問を絞り出す。

「好きな動物は…何ですか？」

「そう来たか」と蓮はメジャーかつ突拍子もない質問に拍子抜けするが、少しの間視線を宙に泳がせて考える。そして彼の中で出た最適解を、マキナに告げる。

「猫…かな？」

「そうなんだ…」

ふむふむ、と天音。更に彼女は付け加える。

「蓮くん猫好きそうな顔してるもんね。ていうか、猫に似てるかも…」

「…それは『誉め言葉』として受け取っておく」

蓮は軽い『悪口』にハアとため息をつきつつ、二人に別れを告げる。そして一人教室へとあしを運ぶ。

教室の前まで来ると、何やら中から人の声が聞こえる。それも女の声だ。聞いた限りでは、誰かと話しているわけでも歌っているわけでもないことが分かる。けれど、聞こえてくるセリフは明らかに誰かに向けて発せられている…一体誰に？と、蓮は不安を募らせるも、自慢の『度胸』で教室の中を覗いてみた。

中には…金髪の少女が一人。単語帳を開きながら、発声練習をしているように見え

た。

「あく……あたしの言うことが聞けないっての!? ……今のは良かった！」

謎のセリフを連発しては、自らそれを褒めたたえている。蓮はますます不安を募らせる。が、害のあるものではないと判断し、意を決して教室の中に足を踏み入れる。入つてすぐは、彼女も気が付いていなかったが、蓮が机にぶつかつた音に気が付くと、その青い瞳で彼を捉える。

「う、うわえええあああ……」

連に驚いた彼女は机を押しつけて強引に後ずさる。

「ど、どなた……じゃなくて、誰よ、あんた！」

威勢がいいのか悪いのかパツとしない彼女を前に、蓮は眼鏡を中指で押し上げると自己紹介をする。

「雨宮 蓮だ。聞いてると思うけど、転入してきた。よろしく」

蓮は落ち着かない彼女に歩み寄ると、不思議そうな顔で尋ねる。

「演劇か何かの練習か? ……それなら邪魔してすまない」

「え、演劇じゃないわよ! それに謝らないでよ、何だか私が悪いみたいじゃない……!」すると、彼女はくるつと振り返つて何やらぶつぶつと独り言を言う。しばらくそやってっていると、また蓮の方に向き直つてぎこちない様子で自己紹介をした。

「わ、私は松嶋 みちる（まつしま みちる）。このクラスで『委員長的なこと』をしてるわ！」

「は……？」

思わず声が漏れる。率直な疑問は蓮の脳内フィルターを華麗に通過し、そのまま言葉として飛び出た。

「『は……？』って何よ！なんか文句でもあんの！」

「いや、クラス委員的になって何だ的って……意味あるのか？」

「ちよ、ちよおおっと！それ以上言ったら承知しないわよ！」

（めんどくさそう……）と、蓮の防衛本能『的』な機能が働き、追及するのを止める。

「まあ、なんだ。とにかくよろしく、『みちる』」

「な、名前？」

「なんだ、気に入らないのか？」

「べ、別に！本当は『様』ってつけて敬わなきゃいけないのよ！」

「そうだったのか……失礼しました、『陛下』」

「よそよそしすぎるっ……はあ、あんたは特別に名前でもいいわ」

みちるは蓮の融通の利かなさにやれやれとため息を漏らす。「あんたもうちよつと柔軟になりなさいよね」と蓮に指摘する。彼はさっぱり訳が分かっていなかったが、何と

なく頷いておいた。

すると、教室の引き戸をガラガラと開ける音。どうやら、マキナ、天音、幸の三人が教室に来たようだ。三人はそれぞれ軽い挨拶と共に教室に入ってくる。そこで、みちるの姿を認めた幸が微笑む。

「おはようございます、みちる様」

「おわあああつ！ちよ、ちよつとー！」

みちるが顔を真っ赤にして、幸の元へ飛んで行く。そして、小声で幸に耳打ちする。

「い、今は様々をつけなくていいーから」

幸はそんなみちるの恥ずかしさなど露知らず、につこりとほほ笑むと声のポリュームを変えずに話す。

「では、おはようございます、みちる」

「や、やつぱり様々つけて！」

そのやり取りを傍で見ていた蓮は、頭をボリボリと掻く。一方で、天音はクスクスと笑いを堪え、マキナだけ状況が理解できていないようだった。

5. カッターナイフ

皆が揃ったところで、授業が始まる。が、蓮は教科書を広げたまま、授業ではなく教室の様子を見るのに意識を注いでいた。転入初日に学園長から聞いた話では、生徒数は蓮を含め「六人」のはず。しかし、ここにはマキナ、みちる、幸、天音、蓮の「五人」しかない。

——あと一人は……どこだ？

蓮は頬杖をつき、窓から学園の中庭を眺め、思考に耽る。どうしてあと一人いないのだろうか？その疑問の答えを探す。学年が違うから……と言うのはない。二年生のみちる、一年生のマキナがこの教室にいるから、恐らく一、二、三年合同の授業なのだろう。次に病欠という可能性。一番あり得そうだが、蓮はそうではない事を知っていた。寮から出る際に目にした「在籍確認ボード」には、すべての寮生が「外出」の札を掛けていた。つまり、誰も寮にはいない。療養中という訳ではないということだ。

じゃあどういふことだ、と頭を悩ませていたが、一向に納得する解が出ない……。そのまま全く聞いていなかった授業も終わり、放課後を迎える。各々席を立ち、帰りの支度を始める。すると、おもむろに天音が口を開く。

「今日も榊さかきさん来なかつたね…」

(榊…?) 蓮はその名前に心当たりはなかつた。が、恐らくまだ見ていない生徒であろうことは予想できる。

「榊…? 誰だ?」

蓮は机の中の教科書をカバンに押し込みながら、尋ねる。その質問に答えたのはみちるだつた。

「榊 由美子(さかき ゆみこ)だよ。最近夕方にしか来ないのよね」

「ゆみちゃん…どうしちゃつたのかな」

マキナも心配そうだ。自然に考えれば、何か教室に來れない“理由”があるのだろう。蓮はその理由が何か突き止める材料を今はまだ持ち合わせていなかったもので、それについては考えるのをやめた。そして、そそくさと教室から去ろうとした蓮を、幸が引き留める。

「あの…雨宮さん」

「ん? どうした?」

「もしよろしければ、校舎をご案内しましょうか?」

幸の親切な申し出に蓮は遠慮しようとしたが、断るのもなんだと思ひ快く受ける。

「——と言うことで、以上がこの学校の主な設備になります」

幸と学校内を巡っている内に、すっかり日は傾いていた。

「ありがとう」

「いえ、これもクラス委員の役目です」

勤めを終えた幸は満足気に笑う。そんな幸を横目に、蓮は水平線に浮かぶオレンジ色の太陽に見入っていた。東京では絶対に見ることのなかった光景。ビルに阻まれることのない、綺麗な夕日……。そんな蓮の前に、突然幸が立ちはだかる。

「あ、あのっ……」

蓮は立ち止まり、幸を見る。その瞳は必死に何かを訴えようとしていたが、彼女は黙ったまま何も言わない。そして遂に「何でもありません」と言い残してその場を去ってしまった。一人オレンジ色の廊下に取り残された蓮は、幸に対して何か無礼があったかなど記憶を丁寧に洗い出すが、特にこれと言って見つからない。……一体何が彼女の機嫌を損ねたのだろうと、頭をボリボリと掻きむしりながら、再び教室を訪れてみる。

——女の子……？

教室には先客がいた。窓際に座る、美浜学園の制服を着た黒髪の女の子……。蓮は彼女に見覚えがなかった。つまり、まだ挨拶をしていない残る一人の生徒が彼女だろうと気

づく。そうとなれば早速挨拶をしなければ、と蓮は教室の引き戸を開ける。その時、窓から風が吹き込み、赤色に染まった真つ白なカーテンがゆらゆらと風に吹かれて揺れる。

「…君が、榊さん？」

蓮のぎこちない問いかけ。そう、彼女の禍々しい人を寄せ付けないオーラに、蓮は少しばかり狼狽えていた。そんな勇氣ある連の言葉に、彼女は一切興味を示さない。むしろ避けるように、読んでいた本をカバンにしまい、さつさと帰る準備を始める。

「無礼があつたなら謝る…だから…」

そう言つて、謝ろうと彼女に近寄つた蓮。突然、彼女は立ち上がり、目にも止まらぬスピードでいつの間にか握つていた“カッターナイフ”を蓮に向けて振るう。咄嗟に飛び出た連の右手が、カッターナイフの刃を握る。そのまま、強く拳を握りこみ、彼女の動きを止める。が、グイグイと刃を引き抜こうと彼女がナイフを動かしたせいで、そのままポキッと軽い音とともに、カッターナイフが根元から折れる。

「…っー」

蓮の拳からダラダラと際限なく流れる真つ赤な血液に、彼女はぎよつとして言葉を失う。彼は握りこんでいた拳の力を抜くと、真つ赤に染まった刃がひらりと宙を舞い、地面の血だまりに落ちる。

「きゃ、きゃあああああ……!!」

彼女は挨拶をする間もなく、そのまま教室を飛び出ていった。最後に見た彼女の目には、計り知れない「恐怖」の色が滲^{にじ}んでいた。——血を見るのがそんなに怖いのか？と蓮は首を傾げるが、後からじわじわと拳に流れ込んでくる痛みに、思わず声を漏らす。

保健室にたどり着いた蓮は、棚を漁り、消毒液とガーゼと包帯を掻^かつ攫^とう。そして丈夫な左手で、器用に治療を行う。こういう時に武見のクスリがあれば……と彼女の重要性を再び痛感させられる。

一通りの治療が終わると、引^ひつ張^はり出した消毒液などを元あつた場所に戻し、寮へと帰ることにした。

6. someone inside...

——今日は大変な一日だった。と蓮は振り返る。半ツンデレ少女みちるにたゆんと揺れる天音、律儀で可愛いが恐らく機嫌を損ねてしまった幸、後はコミュニケーション能力を疑うマキナに極めつけは「カッター少女榊」……。大変なのは「今日」ではない、この「学園生活」だ。彼はとんでもない誤解をしていたと頭を抱える。

中庭を通り過ぎ、真っ白な学生寮の建物が見えてくる。白なだけあって、良く夕日の色に染まっている。

嗚呼、人肌が恋しくなる。蓮は久しく会っていない側室：じゃなくて愛人：でもなくて「彼女」達を思い出す。バレンタインデーは散々だったと彼は記憶している。何せ全員でルブランに乗り込んできて、好き放題俺のことを滅多打ちにして帰っていったからな。と、蓮は苦虫を噛み潰したような顔をする。：まあ元はと言えば、彼の失態が原因なのだが。それはともかくとして、彼女たちは元気になっているだろうか。また顔が見たい。

学生寮のガラス扉を押し開け、靴を仕舞う。そして札を「在籍」に反してから自室へと向かおうとした時、彼はある異変に気が付く。

——扉が少し開いている…？

即座に忍び足に切り替え、ドアの横に張り付く。中の様子を伺うと、蓮は思わず目を見開く。そう、中に「裸」の天音がいたのだ。しかも、何か作業をしている。こうしてはいられない。と、蓮の「ライオンハート」の様な「度胸」が、彼を鼓舞する。すべての戸惑いを捨て去った彼は、なんの躊躇もなく、扉を開け放つ。

「きゃっ！」

天音は扉が急に開いたことに驚いたが、はだけた胸を隠そうとしない。…というか、隠すつもりも無さそうだった。

「急に開けないでよ〜」

蓮は何を言われるかと内心ヒヤヒヤしていたが、彼女からはその一声だけ。その後はまた黙々と着替えを進める。なので、蓮も何も言わずに部屋に入る。バッグをフックに掛け、制服を片付ける。まるで天音がそこにいないかのように作業を進める蓮に、天音は戸惑う。

「ちよ、入ってくるの…？」

「そう言われたって…ここは俺の部屋だ」

「でも女の子が着替えてるんだよ？」

「別にいいよ。見えて悪い気はしないし」

「いや、見られてる方の心配もしてよ!!」

(めんどくさそう…)と一瞬これ以上の議論を止めにしようとするが、蓮はあえて続ける。

「嫌ならしばらく外に居ようか?」

「別に…そこまでしてもらわなくていいわ」

それなら…と蓮はワイシャツもズボンも脱ぎ、パンツ一つで彼女の真横を通り過ぎ、ベッドに腰を掛ける。そしてクロスワードパズルの本を拾い上げて解き始める。

「なんかみよーに女慣れしてない?」

「なぜそう思う?」

「だってホラ、私の体見ても何にも言わないじゃん」

「…いい体だと思う」

「いや、そういう感想とか要らないから!」

蓮にとつて女性の裸は別に驚くに値するものではなかった。まあ、天音の“大きさ”には息を呑んだ彼だが…。彼女の言う通り、彼は女慣れしていた。しかも、“とても”。東京で九股を敢行し、挙句の果てにその九人の女性と夜を共にした…。

「やっぱり女慣れしてるわね…。家族に女の子とかいるの?」

一瞬、蓮の表情が引きつる。当然天音はそれを見逃さない。

「いない…一人っ子だ」

「へえ。じゃあ『彼女』かあ」

天音は嬉しそうにクスクスと笑う。蓮にはなんで笑っているのか理解できなかった。

「お待たせ〜!」

着替え終わった天音は、蓮と一緒にベッドに腰かける。

「待つてない…けど」

「ねえ…一人っ子って嘘でしょ」

その追及に、蓮は答えない。表情一つ変えずに黙々とクロスワードパズルを解き続ける。が、しばらくして本とペンを置くと静かに口を開いた。

「今はいない。…『かずき』と言う姉がいた」

「っ!」

天音の表情が一瞬こわばる。

「へえ…そうなんだ」

それだけ言うと、彼女はぐぐつと腕を伸ばし、わざとらしく胸を強調する。

「どう、似合う?」

蓮は何も言わない。その代わりに、怪我をした右手で天音の大きな胸を揉む。突然の出来事に、天音は思わずその手を払いのける。

「な、何すんのよ！」

「…すまない。久しく揉んでなかったからな」

コイツ…野暮つたいただの「イケメン」パーマかと思つたけど、油断できないむつつりスケベかも。と、天音の彼に対する評価がひっくり返る。が、彼女も彼の悪魔のような「魅力」の前では、ただのメス同然だった。

「別に…好きならもつとしてもらつて構わないわよ」

魔性の男と呼ばれる程の魅力が、彼女の羞恥心を蝕む。

「いや、十分だ。ありがとう」

それだけ言うと、蓮は再びクロスワードパズルの本に視線を落とす。なんだか期待して損した…と、天音は肩を落とすと、そのまま蓮の部屋を後にする。彼女が完全に出ていったのを確認すると、彼はクロスワードパズルの本を仕舞い、ベッドに寝そべる。

——なんで部屋の鍵が開いていたんだ。

部屋の扉を開けた時から、彼の頭の中はその疑問で一杯だった。そう、彼は確かに出かける前に部屋の鍵を閉めたのだが…天音はそれを無視したように部屋の中へと入れた。無論、鍵はずつと蓮のポケットの中にあつた。

——何だよ…それ。

不可解な現象が、彼を悩ませる。

そんな蓮は、出ていったはずの天音が、蓮の部屋の前で不気味な笑みを浮かべながら、しばらく立ち尽くしていたのを知る由もなかった。

7. l o s t s o m e t h i n g

考えれば考えるほど、沼の深みにハマっていくような気がした。蓮はベッドから起き上がり部屋着に着替え、水道の蛇口をひねる。そして怪我をしていない左手で顔に水をかける。再び蛇口をひねって水を止め、おもむろに鏡に映った自分を眺める。まったく、まるでナルシストみたいじゃないかと、鏡の前から早々に引き揚げる。

——ちよつと散歩でもしよう。そう思い、蓮はドアを開け、寮の廊下に出る。すると、廊下で何やら幸がキョロキョロと辺りの様子を伺っているのに気が付く。

「幸、どうしたんだ？」

蓮がそう尋ねると、幸はこちらに気が付いたのか、足早に駆けよつて来る。

「あ、雨宮さん。手先は器用なほうですか？」

唐突な質問に、蓮の頭上には疑問符が浮上する。が、質問にはすぐ答える。

「ああ、器用さには自信がある」

潜入道具の制作で鍛えた彼の「超魔術」とも言える「器用さ」を持っていることを、彼は自覚している。そして、並大抵ではない自身も持ち合わせていた。

「良かった！実は部屋のパソコンの調子がおかしくって……」

「任せろ」

蓮を連れした幸は、自分の部屋へと招き入れる。度々女性の部屋に訪れてきた蓮だが、幸の部屋の清潔さには驚かされる。が、それと共に彼は「些細な」違和感を覚える。——なんだか女の子物が少ない。というか、あまり部屋に個性というか「色」が感じられなかった。蓮は少々言葉にできない気味悪さを感じるが、今はパソコンの修理が先決だ。と、邪念を振り切る。

「このパソコンなのですが…」

幸の示す先には、テーブルの上に置かれたラップトップのパソコン。画面はしっかりと映っているようだけど…。

「なぜか『ウイルスに感染しました』という警告が出るのです」

蓮はそれに心当たりがあることに、とても情けないと思った。彼自身もそれに何日悩まされたことか…というのはただの思い出。今はとにかく、彼女のパソコンから「邪魔な物」を取り除かなければ。

「よし、これでいいはずだ」

キーボードでカタカタと文字を打っていた蓮は画面から顔を上げると、後ろで心配そ

うに様子を伺っていた幸に微笑みかける。そして、幸がいかかわしいサイトを覗いていなかったことに一安心する。

「ありがとうございます！」

「礼はいいよ。また何か困ったことがあつたら言つて…」

「——あ、あの！」

颯爽と立ち去ろうとする蓮を、幸が引き留める。

「何か…何かお礼をさせていただけませんか？」

彼にとつて、これは昼間の幸への無礼の「贖罪」でもあつた。だから、何かしてもらふなどということは正直、また彼女に借りを作つてしまうのではと思つていた。

「いいよ、お礼に値することなんて…」

「いえ、それでもさせて下さい！…何でもいいので、何か要望があれば」

一体どうすれば断れるんだ…。と蓮は頭を抱える。そして、無理難題なお願いをすれば彼女も引き下がってくれるだろうと考えた。後に、彼自身それは安直な考えだったと後悔することも知らずに…。

蓮はニヤリと笑みを浮かべると、冗談半分に最近女性に会っていないから欲求不満である旨を伝える。頬を赤らめ、目を見開く幸を後に「やっぱりなんでもない。おやすみ」と言つて部屋を去ろうとする。が、またもや幸の一声が彼を引き留める。

「いい、いいですよー!」

「…え?」

しばらく膠着状態に入る。蓮は幸が何を言っているのか理解できない。一方で幸は、蓮の反応を待つて何も喋らない。

「いいって…何が?」

「だから…その…私が雨宮さんのお相手になります」

これは大変なことを言ってしまったと、何も言わずにそくさと立ち去ろうとする蓮の腕を、幸が引つ張る。蓮は思わず「わっ」と腑抜けた声を出してしまう。無理しないでいいと幸に言うのと、彼女は無理はしてないと一歩も引かなかつた。驚くことに、彼女の瞳は固い決意の色に満ちている。そんな奇想天外な状況でも、蓮は彼女の「異常性」に薄々気が付いていた。…頼まれたことに異様なほどに執着する彼女の姿勢。しかしそれとは相反するように、彼女の目に多少だが恐怖の色が滲む。

—— 一体何を恐れているんだ?

蓮の直感が、彼を断つてはいけないと論ず。そして、彼もまたその直感を信じる。

「分かった…それじゃあお願いするよ」

「かしこまりました…」

彼女のメイド設定は、このような場合でも一切乱れない。今、彼女のよそよそしさが

何だか生々しく感じられる。普通の男子高校生なら飛んで喜ぶ状況だが、蓮はこの場に漂う拭いきれない違和感と彼女の異常性に一抹の恐怖を感じる。

——普通じゃない。

彼は背筋を冷たいものが通り抜ける感覚を覚える。そんな蓮を横目に、幸は淡々とメイド服を脱ぐ。そしてすべてが地面に脱ぎ捨てられた後、彼女のすべすべとした肌が顔を見せる。まだ膨らみきっていない発達途上な胸。それらすべてが、蓮の視線を釘づけるのに十分だった。が、蓮の視線は未だに幸の目を捉えていた。

「本当に……いいんだな？」

「は、はい……それでは『お口』で……」

蓮は再び確認を取る。幸はそれに辛うじて頷くと、今度は膝立ちになり、蓮の股に顔を近づける。局部に急接近された蓮は思わず後ずさりしそうになるが、堪える。

「それでは……失礼します」

拍動を直に感じる。まるで心臓が頭の中にあるみたいだ。と、蓮は呼吸を荒げながら、下の様子を伺う。もはや、彼に自制心という歯止めは利かない。ただあるのは、一抹の不安とこれからの展開に向けられた好奇心、そして忘れかけていた『屋根裏のゴミ』という人格だけだった。

8. look out!

「な、何も飲まなくてもいいのに…」

幸は未知の味に顔をしかめる。しばらく口の中のソレとの闘いを繰り広げた後、ごとくと勢いよく飲み込んだ。ぷはっと息を吐いた幸は、涙目で連に微笑みかける。

「ティツシユの節約です」

ティツシユくらい使えばいいのに。と、冷静になった蓮は再び幸の顔をまじまじと見つめる。それに気が付いた幸は、頬を赤くして顔を逸らす。

「そ、その。今日のことには皆さんには秘密に…」

蓮はこくりと頷く。もちろんだ。こんな痴態が知れ渡れば、“不純異性交遊”とか何とかかそう言う名目で停学、最悪の場合“退学処分”もあり得るのだ。既に、例の傷害事件で彼は一年過ぎした学校を退学している。無論暴行事件の容疑者など学校に置いておけるはずもない。彼もそれは分かっていた。地元での自分に貼られたレッテルは最悪。いくらあの事件が“冤罪”だったとは言え、人々の意見はコロコロと変わらな

い。
「もちろん。当たり前だ」

「良かった…それじゃあ、おやすみなさい、雨宮さん」
ズボンのチャックを上げると、未だに裸の幸に向き直る。まだ何かあるのかと不思議
そうな顔の幸に近づくと、

「すまない、しばらくその唇借りるよ」

そう言つて片手を幸の顎に添えると、ぐいと顔を近づけ、唇を重ねる。その一瞬、部
屋の時間が完全に停止したように思えた。彼女は目を閉じ、受け入れる。一切拒否反応
を示さない彼女を弄ぶように、蓮は唇を深く絡ませる。一瞬だが、長い。一日よりも遙
かに長く感じられるその時間は、やがて終わりを告げる。離れた唇が糸を引いて、互い
のそれを名残惜しむ。

「な、なんのつもりですか…?」

蓮はにやりと笑みを浮かべる。月の明かりが窓から差し込み、不気味に彼の顔を照ら
し出す。片側は月に照らされ、穏やかな表情の蓮。もう一方は…影を帯び、不気味に口
角を吊り上げた「悪魔」の不敵な笑み。果たして、彼女は「雨宮 蓮」に惹かれたの
か、「悪魔」の誘惑に踊らされているのか。それは彼女にも、当人にも分からない。た
だ、幸が蓮に対して特殊な感情を抱き始めていたのは間違いない。

「秘密を共有する『親友』への挨拶だよ。ただそれだけ」

それだけ言おうと蓮は部屋を後にする。残つたのは…複雑な感情に溺れる幸と、男女の

残り香だけだった。

部屋を出た蓮はあることに気が付く。それまで一切感じ取れなかったが、外に出たことではつきりと分かる。彼はそのまま自室へは戻らずに下駄箱に向かうと、靴に履き替え寮を出る。夜間の外出禁止令は特にないので、外に出ると校舎を目指して歩き始める。

校舎の扉をピッキングし堂々と中に入る。そしてひたすら階段を上がり、屋上の扉を開けて外に出る。そこは校舎の屋上。普通だったら施錠されて夜は出ることができないが、パレスでのピッキング経験を活かして扉の鍵を開錠した。

蓮は屋上の手すりの傍まで寄ると、両手をポケットに突っ込み、空を仰ぎ見る。一面黒が広がる中に、雲がうつつすらと浮かぶ。その中に他の何とも混ざらない異色を放つ：自分の色を持った“月”が浮かんでいる。

「月って…まるで“人”みたいだ」

突如、独り言を始める。その顔は先ほど幸に見せた“悪魔”の表情にそっくりだった。

「見せるのはいつも同じ面。裏側は絶対に見せない…誰にも。いつも光が当たるのは表の顔だけ」

「…でも裏側は見たくない、きっと知ったら“後悔”するから」
彼は振り返る。

——「そう思わないか？ 榊^{さかき} 由美子^{ゆみこ}？」

9. Phantom Thieves

そこには壁に寄りかかり、腕を組んで神妙な面持ちの彼女がいた。

「…最初から分かったの？ 私が後をつけてたこと」

「はつきりと分かったのは幸の部屋を出てから。だけど君のことだ、きつとその前から尾行していたんだろ？」

「鋭いわね…『流石』、と言ったところかしら」

蓮はフツと笑う。

「君、かなり俺のことを調べたんだろ？」

「ええ、もちろん」

「それで、成果は？」

由美子はぐつと歯を食いしばる。彼に殆ど成果がなかったのを見透かされ、それを嘲られているような気がしたからだ。しかし、実際にそうだった。

「なさそうだな」

「ええ…明確に分かったのは、二年前に傷害事件で退学になったってことだけ」

「充分じゃないか、素人にしては上出来だ」

「けど……!」

彼女は思わず踏み出す。戸惑いと混乱、そして恐怖が彼女の体を突き動かした。

「おかしいのよ! 何もかも……いくら調べても考えても、違和感しか残らない!」

「……と言うと?」

「『秀尽学園高校』、あなたが二年の時に転入した学校。それと殆ど同時期に、あれが起る」

——『心の怪盗団』による『改心』劇……

彼女の口から懐かしいワードが飛び出る。蓮は、彼女は疑問の核の部分にとうに辿り着いているのではないかと考えたが、今の彼女の戸惑い様から見てそれはないと推測する。

「私、それから怪盗団に関する情報を漁ったの」

「それで?」

「改心させられたのは……名だたる犯罪者、経営者、そして政治家たち。……おかしいのよ」

「……」

「その中に……秀尽学園高校教師、鴨志田かもしだ 卓すくろが名を連ねるのが!」

蓮は、彼女の言おうとしていることが完全に理解できた。

「怪盗団も、彼を手始めに段々と獲物がステップアップするように“強大”になつてゆく」

「なぜ注目の的になりやすい大物政治家を最初に選ばないの？…それは、彼らが最初の内は弱くて、身近な存在ではなかったから」

「そう考えると、鴨志田が狙われたのは納得がいく。身近で、弱い存在であつたから。初期段階の彼らには都合のいい獲物だつた」

彼女は一息つくくと、さつきとは打つて変わつて落ち着いた口調で続ける。

「さつき言つたわよね、怪盗団の活動開始は貴方の転入時期と被るつて」

「ああ、言つてたな」

「石ころなんかを投げ込まない限り、何もないところに波は立たない。けど、実際に何もないところから世間を揺るがす大きな“波”が立つた」

既に感づいた蓮が、口を挟む。

「…つまり、俺がその石ころだと言いたいんだな？」

「そう。怪盗団事件の関係者…ではなく、もつと根幹に関わるような人物。いえ、もしかしたら怪盗団そのもの…」

風が屋上を吹き抜ける。干されていた洗濯物がバサバサと風になびく。

「——あなた、怪盗団のメンバーじゃないの？」

静寂と闇だけが、屋上を包み込む。止まった時間が、彼女の恐怖心を煽る。

「ふ、フフフ……フフフアハハハハハ……」

突然、蓮が笑い出す。彼の高笑いが屋上に響き渡る。静寂を打ち破り、放たれたのは不気味な笑い声。彼女は全く予想のできない彼の「手」に戸惑う。そして、既に踊らされていた。彼女は既に彼の掌にいた。場は掌握され、ペースを奪われる。

「な、何を笑っているの！」

「……惜しいな、由美子」

「っ……！」

蓮は体の向きを変え、由美子と相對する。彼の真黒なシルエットが、綺麗に月に浮かび上がる。

「怪盗団に深く関わっていた、それは認める」

「……」

「「メンバー」……近い、けど違う」

「じゃ、じゃあ、あなたは一体誰なのよ！」

彼は眼鏡を中指で押し上げ、にやりと不敵な笑みを浮かべる。

「改めて…自己紹介を。」

“ココロの怪盗団”

リーダーの

“ジョーカー”

だ」

10. demand

蓮は深々とお辞儀をする。その姿は、さながらショーを演じるマジシャンのようだが、どうやらそれは「始まり」のあいさつではなく、「終わり」のもの様だった。不気味な笑みを浮かべ、紳の予想の範疇を超えた彼の行動は、彼女からしたら異常でしかなかった。

——「ピエロ」

奇想天外な行動で観衆を楽しませる「道化師」。狼狽する彼女の目には、雨宮蓮という男がピエロに見えていた。自分はこの男に感情を揺さぶられている。掌で、いいように転がされている。彼女がそう気づいた時にはもう遅かった。「ショー」は終わりを迎え、蓮は深々とお辞儀をする。「楽しんで頂けたかな？」というセリフが今にも彼から聞こえてきそうだが、彼女は何よりも終始彼の独壇場であったのが許せなかった。

——なんなの、この男…。

丁寧な姿勢から直る彼の顔は、前にみた「雨宮 蓮」の顔に変わっていた。それは、まるで今まで被っていたマスクを脱いだように、コロッと呆気なく変わっていた。さっきの「悪魔のような笑み」はどこに…？

「あなた…どういふつもり？」

榊は食い下がる。ここは何としても一矢報いてやらないと気が済まない。が、咄嗟に出たのは曖昧な質問。

「…どういふことだ？」

もちろん疑問形で帰ってくる。榊は勢いを、自ら湧き上がる、彼に対する畏怖と怒りに託す。

「なぜ、〃自供〃したの？バカなの？」

「馬鹿とは…心外だ」

「だって貴方は自ら正体をバラした。私の根拠のない〃憶測〃なんて〃それは気のせいだ〃とか〃杞憂だ〃とかで有耶無耶にできたじゃない…」

「確かに。でもそうする理由がない」

「つ!!…何それ、あなたこの秘密がバレたらここには居られなくなるんじゃないや…」

「——〃バラさない〃…だろ？」

「なにつ!」

彼女自身、蓮が何を言おうとしているかは薄々気が付いていた。しかし、彼女に芽生えた〃反骨精神〃が思わず彼のキザなセリフに噛みついてしまう。

「交換条件もなしに、いきなり脅し。どうせ口から出まかせだろう」

「そ、それはっ…」

「本当に俺を消したいなら、何も言わず立ち去り、そのまま学園長に届け出ていただく」

「…」

榊は完全に黙る。再びペースは蓮へと戻る。

「別に喧嘩を売るつもりはないが、今は証拠不十分。届け出たとしても相手にされないのがオチ。かといって学園側で調べても何も出て来やしな。警察と東京地検が総力を挙げてても無理だったからな」

すると、蓮は硬直する榊の横を通り過ぎる。

「…他人の事を詮索するのは頂けないな」

「そんなの…私の勝手でしょ？」

「それじゃあ俺は君の事情に突っ込んでもいいのかい？」

「事情…？」

一瞬、榊の表情が曇る。もちろん蓮はそれを見逃さない。

「それじゃあ、俺は寝るから」

ただその一言を残して、蓮は屋上の扉から出ていった。

11. little

蓮は授業をまともに聞かない。しかし、それを教員に悟られるようなバカな真似もしていない。というのも、机の中にスマートフォンを仕込み、ワイヤレスのイヤホンでラジオやら音楽やらを聴きながら「自習」をしているのだ。東京にいた頃にSNSで怪盗団のメンバーと授業中にも関わらず、やり取りしていたのをよく覚えている。そして、メンバーで一番真面目な真に注意されていたことも。

授業の終わりのチャイムが鳴ると、皆口々に愚痴を漏らす。

「あゝーおわゝ。っだゝ!!」

そう言いながら、みちるはうなだれる。その様子を微笑みながら見ている幸。天音とマキナは二人で談笑している。あと一人、蓮の正体に気づいた「秀才」ちゃん、榊と言えは何も言わずにただ黙々と本を見つめていた。なぜそんな表現をするかと言うと、さつきから同じページばかりを見て、一向にめくらないからだ。何を考えているのかさっぱり分からないが、「喋りかけるな」というオーラを放っているのは蓮にもよく分かった。

「触らぬ神に祟りなし」このことわざは的を射ていると思う。カッターナイフで切

り付けてくるような女だ。関われれば、何か痛手を負うに違いない。そう考えた蓮は、バッグに荷物をすべて突っ込むと、教室を出た。

この美浜学園の敷地内には、バラ園というものが存在する。蓮もパンフレットでその名前を見たことはあるが、実際に訪れるのは今回が初めてだった。噴水にアーチ、手入れされた木々が生い茂るその園は、とてもバラ園とは言い難いものだった。なぜなら、バラではない花が植えられ、繁殖していたからだ。

「バラ園……かあ……」

蓮はそう呟くと、足を踏み入れる。バラは咲いていないが、知らない鮮やかな花が生い茂っているお陰で寂しさは一切感じない。むしろ、豊かに感じるくらいだ。

石畳の道を進んで少ししたところにあつたベンチに腰を掛ける。その背後には巨木が生えている。……なんの木かは分からない。とりあえず、彼は持つてきていた本を開く。その時、「ぐがぁ」という唸り声に聞こえなくもない音が背後から聞こえてきた。「誰かいるのか？」と振り返つた蓮の視界に飛び込んできたのは、木陰でいびきをかいて眠っている「マキナ」の姿だった。

スヤスヤと眠るマキナの胸の上には食べかけの真つ赤なリンゴがのっている。どこぞの会社のロゴみたいだ……。と、そんなことを思いながら、蓮自身も木陰へと移動する。

爽やかな風が吹きわたり、なんとも快適な場所だ。マキナがここで居眠りをしてしまうのも分かる気がした。

「うにゃあ……すー……」

寝息を立てるマキナの傍で、木に寄りかかり本を開く。サーつと木の葉が風に揺られて擦れる心地よい音と共に、遠くから波の音が聞こえてくる。そんな快適な環境でしばらく本を読んでいると、突然眠っていたはずのマキナがムクツと起き上がる。そして、リングをひとかじりすると、フラフラと何処かへ行つてしまった。普通だったらそのまま読書を継続していた蓮だが、読んでいた本が面白くないこともあつて、彼女に興味が沸いた。(少し後をつけても罰は当たらないだろう)と呼んでいた本を仕舞い、距離を開けて彼女の後をつける。

しばらく追跡していたが、マキナはあつちに行つたりこつちに来たりと、特にあてもない様子で「徘徊」していた。そんなのが続いた後、ついに中庭の池の前でその足を止めた。蓮も同じように、彼女の後ろで歩みを止める。

彼女は池の前で屈みこむと、ポケットをゴソゴソと漁る。そして取り出したパンくずの様なものを池に振りかける。

「いーっぱい食べて、丸々と太るといいのよき」

そんな独り言を言いながら、過剰ではとも思えるほどのパンくずを投入する。そんな

彼女の背後にいた蓮が、声をかける。

「へえ、金魚か。餌をやつてるんだな？」

「うにやあつ!？」

突然話しかけられたことに驚いたマキナは飛び上がり、そのまま勢い余つて池に飛び込みそうになる。そこを、咄嗟のところで蓮が彼女の服を掴んで何とか阻止した。

「か、軽い」

蓮から飛び出たのはマキナの体重についての感想だった。

「うう…下ろしてよ…」

「あ、ああ。すまない」

陸に戻すと、その手を放した。彼女は蓮の顔を認めるや否や、すぐさま顔をそむけた。頬は赤く染まつている。これが「恋」とか「ときめき」からくる色ではないことを蓮はよく分かつていた。そう、彼女は蓮を警戒しているのだ。こういう時に有効なのは：相手と視線を合わせること。特に幼い、身長の高い女の子と話すときは心がけると良い。と言うことで、蓮は屈んでマキナに視線を合わせる。

「マキナ…だっけ？改めてよろしく」

「…」

「…鯉に餌をあげてたの？」

「鯉じゃないの。金魚」

「え」

金魚ってこんなに大きかったっけなあ…。

「お祭りで取ってきた…」

「へ、へえ…」

すると突然、マキナが飛び上がり、目を輝かせる。

「ザニガニ！ザニガニだ！」

彼女の視線の先にはザニガニ…ではなく、「ザリガニ」がいた。そして無謀なことに、彼女は近くにあった枝を拾うと、それを目いっぱい突き出してザリガニを獲ろうと奮闘する。

「も…もうちょい」

それに見かねた蓮が、マキナがポケットを漁った時に出てきたガラクタの中から、酔イカを拾い上げると、それを紐につけ、枝に巻き付ける。そして、それを池の中に垂らす。

「何してるの？」

12. 悩み

蓮とマキナは池のほとりに座って、じつと待つていた。そう、彼が「ザニガニ」ではなく「ザリガニ」を釣り上げるのを。しばらく沈黙が続いていたが、あまり忍耐のないマキナが不安げな表情で連に彼に尋ねようとしたところで、彼は勢いよく釣り竿を引き上げる。

「取れたぞ」

そういう蓮が握る釣り竿の先を見ると、そこには真つ赤なザリガニが見事に食いついていた。マキナは「すごい」と手を打ち鳴らして驚きつつ、喜んだ。なんとも器用な奴だと蓮は思いながら、釣り竿を彼女に渡す。

「今度はマキナがやってみたら？」

「わ、わたし…?」

「ああ、誰でもできるよ」

マキナは遠慮しつつ、しっかりと蓮から釣り竿を受け取った。そして、さっきの酔いカのみあまりを紐の先につけ、再び水中に垂らす。聞こえるのは鳥のさえずりと、波の音。そんな静寂に近い空間が、二人の交流を促す。

「俺の名前、憶えてる？」

「…あまみや れん…？」

そこは覚えていてくれたのかと、蓮はちよつと嬉しい気持ちになる。しかし、何だか余所余所しさが残る。

「好きに呼んでもらつて構わないよ」

「えーと…じゃあお兄ちゃん！」

「え？」

予想だにしない返事にひっくり返りそうになるが、なんとか踏ん張る。

「だ、だめ？」

「別に構わないよ。マキナがそれで呼びやすいなら。俺もマキナって呼ばせてもらおう」

「うん！」

その返事を機に、しばらく時間が止まったように静かになった。

「ザニガニ…早く釣れないかな…」

だから、ザリガニだつて…というのもなんだか面倒なので、そこは敢えてスルーしてやることにした。しかし、彼女には間違いを指摘してくれるような家族はいなかったのだろうか？

「ご両親が『ザニガニ』って言ってたのか？」

「うにゅ？…違うのよき」

「そうなのか？」

「うん、私が馬鹿だから覚えられてないだけ…」

「間違いだって指摘してくれないのか？」

「…お母さん、私のこと嫌いだから」

蓮は彼女に言われて自分の両親を思い出す。捕まった時に親身になってくれたのは、当時両親くらいしかいなかった。他の連中は揃いも揃って俺のことを『犯罪者』呼ばわりしていた。

「お兄ちゃんは何んでお母さんが私の事嫌い興味ない？」

興味…か。全くないと言ったら嘘になる。人間と言うのは何にだって些細な関心は必ず抱くものだ。部屋のホコリ、人の不幸、他人の素行など。

「興味ない…て言ったら嘘になるな」

「興味あるなら、なんで聞かないのよき？」

蓮は好奇心や冒険心が自分勝手なものだと知っている。それは新たな発見をもたらすだけで、他人の心、そして『踏み入ってはいけない領域』を踏み荒らすというところもない弊害を伴う。なので、彼は冒険家とかそういう類の人種があまり好きではなかつ

た。別に特別恨んでいるわけではないが、冒険家の映画を見ると、何だか地元の人々を見ているような気がする。

「そんなことしない…話したいなら聞くけど」

「ほへー…お兄ちゃんって不思議な人なのよ」

「何故だ？」

彼女が釣り竿を持つ手に力が入る。そして俯いた。

「この学校の人以外は、聞いてくるから…」

「それは…酷だな」

彼は空を仰ぎ見ながら、同情…というよりは返事をする。

「私、馬鹿だから…天音姉みたいにしっかりしてないし、由美ちゃんみたいに頭も良くないから…」

そう言うと、彼女の表情が陰る。そんなことで悩むなんて、よっぽどの自己不信か、誰かにずっと言われてきたからだろう。蓮は、後者だと考える。もちろん根拠はない。彼の培われた感でそう受け取ったから。

「別にバカではないと思うけど…仮に馬鹿だとしても、何が悪いんだ？」

「だ、だって他の人に迷惑かけちゃって…嫌われちゃうから」

「迷惑かけるような人が嫌いな奴は、世の中に沢山いる」

蓮は決して軽い同情、嘘で励ますことはしない。ただ、自分の思ったことを伝える。

「けど、そんな人ばかりじゃないのも確かだ」

彼は空を見ていた視線をマキナに移す。

「マキナの事を大事に思ってる人は、決して馬鹿なんてどうでもいい理由で嫌ったりしない。まあ、赤の他人は別だけど」

「それに、さつきも言ったけどマキナはバカじゃない」

マキナは首を傾げるが、その顔には不安げな表情だ。蓮にはどんな人が本当のバカかよく分かっていた。

「そんなもんな…」

すると、突然グイグイとマキナの持つ竿がしなった。

「き、来た…!」

思い切り竿を引き上げる。すると、先端には蓮の時のように真っ赤なザリガニが吊り下がっていた。

「よく出来たじゃないか。持って帰って育てるといい」

「うん! ありがとお兄ちゃん!」

マキナはそう言うと、ザリガニを驚掴みにしたまま楽しそうに飛んでいった。…その場に取り残された蓮は、何だかもやもやした気持ちのままだった。マキナの事情…これ

は俺にどうこうできる問題ではなさそうだと自分の無力さを感じた。

13. 天音の告白

照りつける太陽の下、広大なグラウンドで体育の授業が行われる。と言っても、教師はいない。生徒たち自身で考え付いた運動やスポーツを行えばオツケーという何とも緩い授業である。蓮も、秀尽にいた時はしっかりと体育の授業を受けていたので、それからは全く考えられなかった。しかも、今日はテキストにそこら辺を走って終わりという何とも舐め切った運動が、蓮を除く全会一致で決まった。

「あ、あ、あ、あああ…」

断末魔に近い唸り声を発しながら走るみちるを最後尾に、前から天音、幸、マキナそして榊が走っている。蓮はと言うと、水分補給と言う名目でサボっていた。

「もう疲れたのよさ〜」

マキナがそう弱音を吐く。それを制するように、天音。

「もう少し我慢しなさい！ いざという時に走れなかつたら困るでしょ？」

まあ、天音の言う通り、体力はつけておいて損はない。と、蓮はペットボトルを傾けながら共感する。しばらく皆ハアハアと息を荒くして走っていると、突然天音の体が視界から消えた。その直後に、ドサツという音が聞こえてくる。

「いったあ……」

どうやら思い切り転んでしまったようだ。地面にへ垂れ込む天音に、皆が駆け寄ってくる。

「大丈夫？天音さん」

榊が心配そうな顔で尋ねる。

「だ、大丈夫……いたっ！」

蓮も天音の傍による。そして、彼女が何やら痛そうに押さえている左足首を見ていると、腫れて真っ赤になっていた。

「これ……ひねったのか？」

「そ、そうみたい……ちよつと保健室行つてくる」

そう言つて、彼女は立とうとするが、想像を絶する痛みのせいか、再び座り込んでしまう。そこに、幸が凜とした表情で名乗り出た。

「私が天音さんを保健室まで運んでいきます！」

流石クラス委員と言つたところ。けれど、蓮は自らが名乗り出た。

「天音は俺が運ぶ」

「い、いいのですか……？」

「ああ、天音一人なんて軽い」

蓮はそう言うと、天音を背負う。

「ゴ、ゴメン蓮クン…」

天音を背負った蓮は、彼女の指示であちらこちら廊下を彷徨うように歩いていた。

「ねえ蓮クン」

「何だ？」

「好きな人とか…いる？」

突然の質問に、蓮の頭上には疑問符が浮かぶ。けれど、天音はこういう人間だということ、日は浅いながら何となく分かっていたので、迷わず答える。

「『好きな人』はいない」

「そうなんだ…てつきり彼女とかいると思ってたのに」

その後、しばらく沈黙が続いたかと思うと、急に蓮は首筋にねつとりと暖かい何かが這う感覚を覚えた。思わずゾツとして背筋が凍ったが、不思議なことに少しづつ心地よくなっていく。一体何だ？と振り返る。そこには、彼の首筋に舌を這わせる天音の姿があった。

「な、何してるんだ！」

「んむ…むう…ぶはっ…単なるいたずら」

彼女はそう言うと、色つぼく笑った。全く、本当に「エロいお姉さん」と言う評価は彼女にぴったりだ。蓮はそう思うと、何だか呆れたような気がした。

「あ、保健室……！」

「そうか。……失礼します」

蓮はそう言って保健室の引き戸を開けるが、返事はない。今は保険の先生は外出中なのか？

「うち、保険の先生いないんだ」

「そうなのか？」

「うん。なんかいい人が見つからないんだって」

なら仕方ないと、蓮は天音をベッドの上に座らせ、ガラス扉の棚からガーゼや氷のうを取り出すと、せつせと彼女の治療を始めた。

「ねえ……あのさ」

「何だ？」

「……付き合ってくれない？」

突然の告白に、思わず蓮は手を狂わせる。そのせいで、彼女の足首に勢いよく氷のうを落としてしまった。「いたっ」と少し痛そうにしていたが、すぐに元に戻った。

「それで……返事は？」

蓮は道具を片付け始める。

「…言っておくが、俺はそんなのに値する男じゃない」

「どういう事？」

今度は片付けていた手を止め、天音の目を見る。

「俺は…クズだ。筋金入りのな」

「え？…性癖の話？」

「違う！兎に角、俺と付き合っても天音が不幸になるだけだ」

蓮はきつぱりそう言い放つと、止めていた片付けを再開する。そこで、天音は更に食
い下がる。

「私、多少の事なら許せるよ！…それに」

天音には彼がとても魅力的に見えていた。けれど、それは並大抵のレベルではない。
世界に一人だけだと思えるほど、彼の持つ魅力は天音をグイグイと引き寄せていた。

「天音、この際だからはっきりと言っておく」

ポケットに手をつ込み、前髪をいじりながら蓮は話す。

「——俺は、既に九股してる」

驚愕の告白。天音はポカンと口を開けたまま、蓮の顔を見る。一方で蓮は、どこか居
心地悪そうに、そっぽを向いていた。

「どうだ？ 気が変わっただろ？」

蓮はこれで天音も諦めがついただろうと、保健室を後にしようとするが、そんな彼の腕を、天音が掴んで引き留めた。

「それでも…いいよ」

14. 彼女と、会社

「何だと?」

「だから…別にそれでもいいよって…」

何を言っているのだこの女は。と、蓮は困惑する。普通ここはドン引きして態度を変えるのが普通じゃないのか?それとも俺の認識が間違っていたのか?とか色々と推測するが、彼は理解が追いついていなかった。それよりも彼の「暴露作戦」が見事に失敗し、窮地に陥ってしまったこの状況を一刻も早く打開しなければならぬ。

「本気か?天音」

蓮の問いかけに天音は静かに頷く。目は本気だ、これは質の悪い冗談なんかじゃない。そう気が付いた時にはもうクライマックスを迎えていた。

「それで…返事は?」

彼女は頬を赤らめ、上目遣いで蓮に求めてくる。そんな様子を見て蓮の決意が揺らぐ。そして、自分の魅力を恨んだ。こんなの、悪い事ばかりじゃないかと。

「そんなに言うなら…いいよ」

「えっ!」

蓮の渋々の承諾に天音は驚く。

「ただしきつきも言ったように、俺は『グズ』だ。そこは勘違いしないでくれ」

「わ、分かった！…あ、ありがとう！」

彼女はすごく嬉しそうに笑って見せる。その笑顔を見た蓮に、ふと昨日の様な違和感が襲う。——これでまた一人。その邪悪な思考がどこから沸いたのか分からないが、彼はその邪念を急いで振り払う。

「ね、ねえ。…そう言えばここ誰も来ないんだよね」

何を思ったのか、天音はそう言っただけ頬を赤らめると、トロンとした目で体操着をはだける。そんな彼女に呆れた蓮は「ハア」とため息をつく、踵を返して引き戸に向かう。

「ちよ、ちよっと！何帰ろうとしてるの？」

「ケガ人なんだから大人しくしておいた方がいい。俺は先に戻ってる」

「ちよっとー！今の雰囲気どうなったの！」

色気づく天音を放置して保健室を出てきた蓮は、昇降口の自動販売機の前で考え込んでいた。運動の後やはり無難に水を選択するのがいいのか？それとも欲求に正直に

なって、炭酸飲料を……。考えれば考えるほど無限に続く螺旋階段みたいにくるぐると思考が複雑に、こんがらがっていく。

そうやって悩んだ挙句、買ったのはお茶だった。

「ずいぶんと悩んでたのね〜」

背後から女性、学園長の声が聞こえた。

「が、学園長？」

「私も買いたいたいものあるからちよつとどいて〜」

蓮は慌てて退くと、お茶のキャップを外す。

「いつからそこにいたんですか？」

「うーん、十分前？」

十分も気配を消して背後に潜んでいたのか。中々侮れないな……学園長。さつさと立ち去ろうと思っていた蓮だったが、とある疑問を抱えたままもやもやしていたので、学園長にぶつけてみることにした。

「……榊 由美子だが」

「あら、榊さんがどうかした？」

「別にどうと言うことはないんだが……榊って例の『榊』か？」

学園長は蓮と同じお茶を購入すると、キャップを開け、一飲みする。

「あなたがどの種の事を言っているか分からないけど……この学園を運営する『東浜電鉄グループ』の総帥、種 道明（さかき みちあき）さんの娘さんよ」

話すのが不快だと言わんばかりに、学園長はぐびっとお茶を飲む。一方で、蓮は聞きたいことが聞けて満足したので、飲みかけのお茶と共にその場を後にした。

（東浜電鉄グループ……か）

学園長からの話を聞いて確信を得た蓮は、更に浮かび上がる疑問を整理していた。

15. ココロの怪盗団

今日は朝から寮内が騒がしかった。高級車が数台、校門の前に整列しているためである。それは明らかに異様な光景で、マキナとみちるがギヤーギヤーと騒ぎまわっていた。それを天音がなんとか押さえつける。

「でも、なんだろうねアレ」

天音が不思議そうな顔で、蓮に投げかける。

「分からない。なんかの業者か…?」

そう推測してみるが、業者にしては高級な車だと、すぐに間違いに気が付く。では何だろうと考えていると、その場に榊の姿がないことに気が付く。

「そういえば榊の奴は?」

「あ、榊さんなら寮の屋上に行ったわよ」

屋上…?なぜそんな所だと思うつつ、興味が沸いた蓮は屋上に行ってみることにした。

鉄扉を開けると、そこは寮の屋上。洗濯ものが風になびいて、海が一望できる素晴らしい場所だ。しかし、そこには榊の姿もあつた。蓮はしばらく静かに彼女の様子を観察する。どうやら空を眺めているわけではなく、高級車の方を見ているらしかった。

「おい、榊」

蓮がそう声をかけると、榊はびくつとして振り返る。

「雨宮くん?…なんの用かしら」

「別に。急に屋上に行ったからなんだろうと思つてきた」

「本当に?…?あなた “分かつてて” 来たんでしょ?」

分かつててとは何だろうと、蓮は首を傾げる。

「分からない。全く」

「…あの車から降りてきた人が誰か知らないの?」

そう言つて彼女は高級車を指さす。その方向を見ていると、丁度スーツ姿の男が車から降りるところだった。そして、蓮はその男の顔に見覚えがあつた。

「榊 道明…!」

その男は榊 道明。榊 由美子の父親であり “東浜電鉄グループ” の総帥。何故こんなところにと最初は疑問に思つていたが、後にこの学園が東浜電鉄グループによつて運営されている事を思い出した。

「視察…か」

「…」

蓮のつぶやきに、榊は一切興味を示さない。完全に父親に気を取られて、彼のことで眼中になかったのだ。それからしばらくして、彼女の父親の姿が見えなくなると、彼女は溜息をついて空を仰ぎ見る。

「ねえ、人の心を盗むって…本当なの？」

突然の質問に蓮は拍子抜けするが、真面目に答える。

「事実、盗まれた人がいる」

「それもそうね…一体どんな方法だったのかしら」

そう言っただけで彼女は振り返ると、蓮に向き直る。その顔は、怒りとも疑問とも言えない表情を浮かべている。

「脅迫？拷問？マインドコントロール？」

「…違う、そんなことはない」

「じゃあ何だかって言うの？何が彼らを変えたっていうの？」

榊は語気を荒げる。

「説明しても理解されない。だから話さない」

「別にいいわ」

強がりか、そう言うのと再び空を仰ぎ見る。しかし、その横顔は何だか悲しげな表情だ。

「ねえ……」

「なんだ？」

「ココロの怪盗団って、なんで活動してたの？……名声のため？金のため？」

「——違う」

ここで、榊の言葉を遮って、蓮がその言葉を強める。思わず、榊はハツとして彼の表情を伺う。

「金、名声。そんなちっぽけなものに、『俺たち』は命を懸けた覚えはない」

蓮の声色から察した榊は、何も言わず蓮の話に耳を傾ける。なるべく興味がないふりをしながら。

「己が信じた正義を貫き通す。そのためには、あまねく冒険を顧みない」

「……」

「誰かが喚く正義など、正義ではない。本当の正義は、自分の信じたそれだと、俺は思っている」

彼は最後まで言い切ると、振り返って屋上を後にしようとする。

「ごめん、余計な話だった」

そんな彼を、彼女の一声が呼び止める。

「ねえ！」

「？」

「ココロの怪盗団って…いえ、何でもないわ」

その言葉を聞くと、蓮は胸に何かが突っかかるような感じを覚えながら屋上を後にした。

16. デリヘルゴッコ

薄暗いコンクリートの部屋……。忘れたくても忘れられない部屋。

「フン……あつけないね……」

ヤツは不敵な笑みを浮かべて、銃口を蓮の額に押し付けている。しかし、蓮は動じない。まるで玩具だと割り切ったように、ヤツの姿をただ見つめている。

「君のくだらない正義も、ここで終わりだ……」

キリリとトリガーが引かれる音がした。

——パシユツツ……！

空気を裂くような軽い音と共に、銃口から硝煙が立ち昇る。そして、蓮の意識が段々と遠のいていく……即死ではなかったのか？……頭を撃ち抜かれても俺は生きているのか……？

しかし、際限なくさらさらと流れ出てくる鮮血を見て、さっと血の気のひく感じがする。

「死ね…ゴミが」

…

…

…

「ぐうっ…！」

蓮が飛び起きたのは、寮のベッドの上だった。額と背中にびっしりと嫌な汗をかいていたので、朝風呂にでも入ろうと、前に使っていたお風呂セットを拾い上げるところで、突然誰かが自室の扉をノックする音が聞こえた。

「失礼します」

その声の主は幸だった。

彼女は蓮が承諾したわけでもないのに勝手に部屋に侵入し、メイド服のスカートをそつと引つ張つてお辞儀をすると、顔を赤らめながら熱っぽい声で言った。

「ご、ご奉仕メイドサービスです…」

蓮は頭に疑問符を浮かべる。『ご奉仕メイドサービス…？』それって川上のアレみたいなのつか？と一人首を傾げながら彼女の顔をまじまじと見つめる。

「あ、あの…今日はいかがなさいましょう…?」

「いかがなさいますかって…えーつと、何しに来たの?」

「ですから…朝勃ち本舗の小嶺 幸と申し…」

「——だから名前は知ってるよ。ていうか『朝勃ち本舗』って何?」

そう質問すると、幸はモジモジと恥ずかしそうにする。

「雨宮様の朝の『火照り』を鎮めるために参りました…」

「いや、遠慮するよ。これから風呂に行くし…」

「コースは『フェラチオコース』、『本番ゴム無しコース』、『手コキコース』がご
います…」

「——いや、人の話聞いてた?」

幸はわつと顔を更に真っ赤にする。

「すみません…! さっさとやらせろと言うことですな」

そう言うと、彼女はせつせとメイド服を脱ぎ始めた。

「いや、いいから! 帰って!」

「し、しかし…雨宮様の股間がテントを張って…」

「いいから! チェンジ! チェンジ! チェンジ! お願いします!」

咄嗟に出た「チェンジ」という言葉。流星に代わりはないだろうと、蓮は一件落着

と言った感じでほっと胸をなでおろした。のもつかの間、幸は「かしこまりました」と答えるとそそくさと部屋から出て行った。

(え、他にいるの…?)

「うつふーん、お呼びかしらあ?」

(…え?)

数分後、蓮の部屋にやって来たのはとんだ食わせものだった。

腰をクネクネと曲げて、ふにやふにやとした声で誘惑しているつもりなのか、貧相な身体を見せつける。

「な、なあマキナ」

「違いますうん!…「マツキー」でえす!」

いや、明らかにマキナだ。このちっさい胸、体、身長…どこからどう見てもマキナだ。しかもマツキーとは…源氏名の類だろうかと蓮は思わず「はあ」と大きなため息をつく。

「いや、ガン萎えです。お帰り頂きますか?」

「もー!なんなのよさ、せつかくエツチな女の子を演じてあげたつてのによ!」

そう言つて憤慨(?)するマキナの背後に迫る一人の影…。

「んらっ！」

「いだっ！……あ、あまねえ？」

背後に忍び寄っていた天音が、強烈なげんこつをマキナの頭頂部に叩き込む。意外と痛そうな音と共に、マキナが「ぎーっ」と唸って両手で頭を押さえる。

「何やってんのあんた！」

「うう…サツチンと、でりへる。ゴッコやってただけなのよさ…」

更に、げんこつがマキナの頭に叩き込まれる。

「うわーん！なんでなのよさ！」

「デリヘルゴッコとかどこで覚えたの！…いい？今後デリヘルゴッコは禁止！さっちゃんも相手にしちやだめだからね！」

天音の忠告に、幸はにこつと笑って「かしこまりました」と頷いた。蓮はちよつと期待していただけあつてがっかりしないようなするような気分だった。

「ちよつと、蓮からもなんとか言つてやつてよ」

「ま、まあ…その…気を付けようね」

「それだけかい！」

そんな突つ込みをスルーして、マキナと幸が部屋に戻った頃、急に天音が色っぽい声を出してきた。

「そ、その。彼氏なんだからそういう事は私が…」

「遠慮するよ。それじゃあ…」

「——ちよつと待てー!!」

「…えーつと」

「〃えーつと〃…じゃなくてそこは〃頼む〃とかじゃないの?」

蓮はまだ面倒なのが残っていたかと、頭をボリボリ掻きむしりながら静かに説き伏せる。

「一人で満足してるし、天音にそういう迷惑をかけるつもりはないよ」

「め、迷惑じゃないよ…」

「——つて事で俺は風呂に」

「ちよーつ!!」

天音の呼び止める声から逃げるようにして、蓮は大浴場へと入っていった。

17. 答え

蓮は風呂から上がるとその日の授業を終え、帰りの準備に差し掛かっていた。そこに、ニヤニヤと気色の悪い笑みを浮かべた天音が、フラフラと寄ってきた。

「ねーえ、一緒に帰ろ？」

「え、いいけど……。急にどうしたの？」

そう尋ねると、天音は「くふふ」と笑って更にやける。

「だってえ、私達付き合ってるじゃん？」

そうだねと返すと、まるで真つ向から肯定されたみたいなのに、スルリと腕を絡ませてきた。蓮も、天音の必死さに折れて、渋々……とまではいかないが、天音のために腕を組んでやることにした。

そのまま談笑しながら、二人は学園の中庭を歩いていた。こういう恋人同士みたいなことも、たまには悪くないなと思いつつ、蓮は榊の父親について思案していた。由美子の父親はこの学園を経営する「東浜電鉄グループ」の総帥……いわば、トップ。それも、一流企業の。

由美子や、彼女の父親について考えていたせいなのか、蓮は中庭に佇む由美子の姿を

認める。天音も彼の視線に気が付く。

「あ、あれ榊さんじゃん。何やってるのかな?」

天音がそう言うのとそれが聞こえたのか、榊はくるりと振り返り、二人に寄ってきた。『寄ってきた』は猫みたいな表現だが、実際猫がのそのそと気まぐれにやって来るように見えたので、猫と何ら変わりないだろう。

榊はよつて来るなり、天音に軽くにらみを利かせると、蓮に向き直った。

「雨宮くん、ちよつといい?」

ちよつといい?と言われても：絶対天音がいい思いをしないだろうな…。と思いつつ、取り合えず「何の用?」と尋ねてみた。しかし、榊は「いいから」の一点張りで内容を話そうとしない。

流石の不審さに疑問を持った天音は眉間に皺を寄せる。ここで、蓮はこれ以上修羅場になつたら收拾がつかなくなると悟り、渋々榊についていくことにした。

天音に一言断わつたあと、二人は夕暮れ時の廊下を並んで歩く。夕日が差し込んで真つ赤に染まつた廊下は、なんとも言えない哀愁を漂わせている。

意を決した榊が、蓮に話を持ち掛ける。

「——掲示板で依頼すれば心を盗んでくれるつて本当かしら?」

蓮はピタリとその歩みを止めると、榊の流れる黒い長髪から覗く横顔を見た。しか

し、表情は読み取れず、彼女がどんな気持ちで彼にそれを尋ねたのかは分からなかった。
「本当だ：けど、今となつては昔の話だ」

昔と言つても、まだ終わつてから一年も経つていないが…。兎に角、今はもうその掲
示板も存在しないわけで、頼もうにも場所がないのだ。

「もう、盗んでくれないの?」

「はあ。」

唐突な榎の震え声に驚いた蓮は、素つ頓狂な声を出す。今まで聞いたことのない、榎
の性格からして絶対に聞かないだろう「怯えた声」をその日に、彼は聞いてしまったの
だ。

ここはテキトーに返事をしてはいけないと察した彼は、しばらく考え込んでから返答
した。

「『盗まない』とは言つてない。ただ、活動を休止しているだけ：だと俺は思つて
るよ」

蓮の言葉に振り返つた榎の表情は、さっきの声からは考えられないような「迷い」が
浮かんでいる。悲しいのか、怒っているのかはつきりしてほしい：と蓮は溜息をつく。

「…やつぱり、何でもないわ」

結局、しばらく考え込んだ後に榎の出した答えはそれだった。度々この話題に触れて

いるが、今日まで一步も進んでいない。というより、後退しているようにすら思える。夕日の差す廊下に取り残された蓮は、なんとも言えない哀愁を抱きながら、榊の「迷い」について自分なりに考えてみることに決めた。

「ふう…」

風呂から上がった蓮は、自室のベッドに飛び込み、横になった。そして、真つ白な天井を眺めながら、色々と思案する。この学園の事、自分を含め問題を抱えた生徒たち、そして何より、色々と匂わせてくる榊 由美子のこと…。全てが複雑に絡み合い、やがてぐしゃぐしゃになってくる。

一体榊は何がしたいのだろうか？何かをして欲しいのだろうかという事は何となく予想がつくが、内容はさっぱり分からない…。

「…」

蓮は黙ったまま、真つ白な天井を見つめる。

——考えたくないだけじゃないか…？

それは、榊の事について。彼女が、彼に何を頼みたいのかについての事だ。…そんなの、俺に頼む時点で何をして欲しいのかももう吐露しているようなものじゃないか。と、

蓮は頭を掻きむしった。

“…。そうだ。蓮にしかできない頼み事。世話焼きな幸や天音ですらできない”異常な事

「——”ココロ”を盗む…か」

それが彼の出した答えだった。

間違いないだろうと、かなりの自信が持てる答えだ。それを出すのは、いささか憚られるものがあつたが、それがこの疑問の答えなのだ。

「おーい、蓮。いるの〜？」

ドアの前から聞こえてくるその声は、天音のものだった。

蓮は「入っていいよ」とだけ言うと、ベッドに寝そべったまま、ドアの方に視線を向けた。そして、入ってきたのはやはり天音で、丁度お風呂から上がったところらしかつた。

「あ、ゴメン、寝るところだった？」

天音が申し訳なきようにそう尋ねると、蓮は起き上がって「意外と夜更かしなんだ」と柄でもない冗談を言った。

「よかった。…実は聞きたいことがあつてさ」

そう言う彼女は、蓮に詰め寄る。その表情は、何故か険しい。

「ねーえ、榊さんと何してたの〜？」

18. Which side is darkness on?

蓮はその後天音に昼間の事を問い詰められ、何となく茶を濁して逃げることに成功した。しかし、この頃何かと天音の尻に敷かれているような気がしてならない、と蓮は不安を感じていた。

女たらし……という訳ではないが女慣れしている自分ですら、こんなに翻弄されるんだから天音は異常に違うと考えている。

天音が居なくなった自室はほのかに石鹸の香りが漂っている……。

\$\$\$\$\$

——榊由美子はずっと孤独だった。

およそ友達と呼べる人は、いない。にも拘わらず、身近な家族でさえ、彼女を酷く煙

たがっていた。

いわゆる中流階級に属していた由美子の母親。そんな彼女に、榊道明という……「貴族階級」の男がやって来た。それは由美子の母親、そしてその両親にとつて、一生に一度起こるか分からない程貴重なチャンス。願ってもない、奇跡。

しかし、奇跡は儚く散った。

母親は由美子を産んで……「産めなくなつた」。

身体が弱かつたのだ。一度の出産も耐えられるか否かという瀬戸際で由美子を産んだきり、もう、子どもを授かることはなかつた。

分かつていた。彼女には、こうなることは分かつていた。

そして、その後。榊道明は……彼女を「捨てる」ことも。

…

…
…
…
…
…

.....

.....

「——っ……！」

榊由美子は、酷く苦しい記憶を思い出し、思わず枕に当たり散らしていた。今の彼女は普段の冷静さを欠いていて、まるで別人の様だった。その顔は苦痛に歪み、歯は無意識にギリギリと音を立てている。

真つ暗な自室、月明りが窓をかたどつて地面を照らす。ユラユラと揺れるレースカーテンが、再び由美子を日常へと引き戻す。が、それと同時に月明りは彼の顔を象る。

「雨宮……蓮」

由美子はボソツと呟く。

しかし、そこに本物の蓮はいない。いるのは、由美子の頭の中だけ。

『ココロの怪盗団』

なんてバカなネーミング何だろう。そんな事を、由美子は考えていた。それは半ば意識地で、負け犬の遠吠えによく似ている。——ふざけないで、心なんて盗める訳ないじゃ

ない。と、可能性を否定する理性が、ひたすら「吠えている」。

と、そこで、由美子はふと勉強机の上に視線をやる。そう言えば、先ほどまでパソコンを弄っていたのだったと、彼女は再び勉強机に向かう。そして机上の画面を見つめる。そこには——怪盗お願いチャンネル、かつて怪盗団と一般人の唯一のパイプラインだった掲示板が映されていた。

「……」

無意識にタイピングしようとしていた右手を咄嗟に引き留める。本当にこんな「インチキ」に自分の人生を賭してしまっているのか？ そんな疑念が、彼女を沼に引き込む。しかし、湧き上がる疑問を突き詰めていられるほどの余裕は、もう彼女にはなかった。……失敗するに決まっている。これは、失敗が前提の無謀なギャンブルなんだ。そう、自信に言い聞かせる。

『榊 道明』

掲示板の入力欄に、憎き男の氏名が書き込まれる。そして……由美子はエンターキーを押した。備考欄は空白、何も書いていない。改心させてほしい理由も、彼の「残酷非道」についても。でも、彼女は無意識に思っていた。——「彼なら」、彼ならこの救難信号に気が付いてくれる、と。

「……やはり、書き込んだのか」

突然、部屋の奥、それも真つ暗闇から声が聞こえた。

それは異常だった。

彼女の自室、それも月が輝く真夜中。

同居人はいない。しかも、それは……男の声だった。

「ひっ……！」

由美子は驚いて、椅子から転げ落ちる。

余りにも恐ろしくて、叫ぶ。必死に叫ぶ……が、声が出ない。そうか、人間って本当に「怖いとき」って声が出ないんだ。彼女は、悟った。

しかし、男の声はさつき聞こえなくなり、止んでしまった。今はさつきとは打って変わって静寂が場を包み込んでいる。ヒューと夜風の音、カーテンの揺れる音、遠くから聞こえるさざ波の音。それだけ。それ以外聞こえなくなっていた。だが、それと相反するように由美子の心は酷く五月蠅くなる。

「だ、誰なの！」

由美子はやつとの思いで、部屋の暗がりに向けて声を張り上げる。

返事はない。が、由美子の目は暗闇にぼうつと浮かぶ人影を捉えていた。部屋の奥、真つ暗闇の中にぼうつと浮かぶその人影は、腕を組んで扉にもたれかかったまま微動だにしない。暗闇でその顔は伺えない。その人物がどんな表情かというのも、全く分からない。それだけに、由美子の恐怖心はどんどん肥大化してゆく。

「……」

しばらくの静寂。謎の人物がいなければ、心地よい波の音で寝てしまふような部屋の中で、由美子は人影を睨みつける。まるで「あの男」を睨みつけている時の様な、疑心暗鬼に満ちた瞳で。が、その人影はその視線に射抜かれても、動揺する様子すら見せない。

そして……人影は静かに口を開いた。

「……「真つ暗闇」は得意なんじゃないか？」 榊 由美子」

98 18. Which side is darkness on?

第一章 榊 由美子

19. your choice your life

「……『真つ暗闇』は得意なんじゃないか？ 榊 由美子」

暗闇に浮かぶ人影はそう言った。そして、もたれかかっていた体を起こすと、腕を組んだまま由美子に向かって歩いてくる。由美子は尻もちをついたまま、その人影を見つめていた。

窓から差し込む月光はその人物の足を、そしてお腹を、肩を……最後に、顔を照らし出した。その照らし出された顔に、由美子は驚く。

「雨宮……くん？」

——月光を纏うその表情、野暮つたいパーマは間違いなく『雨宮 蓮』のものだった。

「こんばんは……勝手に邪魔させてもらってる」

「勝手にって、どうやって入ったのよ！ 鍵も閉まっていたじゃない！」

由美子は更に問い詰めようとしたが、数日前の事を思い出す。それは月明りが綺麗な日で、雨宮蓮の『素顔』を思い知った日でもある。当日、由美子は鍵のかかっているは

ずの校舎にまんまと誘導されてしまった。そう、鍵は彼の前では意味を成さない。閉まっていたとしても、それは元から開錠されていたように容易く開かれてしまう。

そういうえばそうだったわね、と由美子は自嘲気味に少し笑う。

「それで……なんで来たの？」

無遠慮に由美子のベッドに腰かける蓮に、訝しげな表情で尋ねる。彼はただ壁に掛かった絵を見つめたまま「なんとなくだ」とときとうな答えを返す。そんな無味乾燥な対応……いや、蓮が醸し出す独特な雰囲気、半ば心地よさすら覚えていた。が、途端に照れ臭くなった由美子は、急いで変な考えを振り払った。

「——不思議だな」

「えっ？」

黙り込んでいた蓮の突然の言葉に、由美子は思わず声を漏らす。

「普段だったら『出て行つて！』だとか『勝手に入つてこないで！』とかそんな罵詈雑言を浴びせて追い出すだろ？　なんで今日は……追い出さないんだ」

蓮は静かに尋ねた。しかし、由美子は押し黙ったままただ床を見つめるだけで、蓮の顔を見ようともしない。そんなことをしたら……泣きそうな顔になっているのがバレてしまう。

「『あの人』から連絡があったの」

「連絡?」

「そう、少し前に。〃自分のところに来なさい〃って」

由美子は数日前に父親からの連絡を受けていた。それは、突然の事で、突拍子もない内容だった。〃家に帰ってこい〃、そういう内容だった。

「帰らないのか?」

「ええ。あんなどころ、死んでも行かないわ……!」

怒りか憎しみからか、由美子は唇をかみしめた。一筋の血が、唇から滴る。

「お母さんと私を邪険に扱っておいて…… 〃跡取り〃が死んだら帰ってこいなんて。虫が良すぎる!」

蓮は震える由美子の拳を一瞥すると、再び足を組んで絵を見つめる。

「——それで、どうしたいんだ?」

「え?」

「榊の父親を、どうしたいんだ? 掲示板に書き込んだからには聞いておかないと」
どうしたいって、決まってるじゃない! と言わんばかりに、由美子は蓮の顔を睨みつける。しかし蓮は一切関心を示さず静かに言った。

「〃改心〃、させたいのか?」

「ええ」

由美子の決意は固いように見えたが、蓮はそれが揺らいでいるのに気が付いた。彼女は……「迷っている」。父親の処遇について、考えが揺れていた。

その隙を突くように、蓮は付け加えた。

「壊すことだつてできるんだぞ、君の父親を」

「壊す？ そんなことができるの？」

蓮は「ああ」と一言返事をする、立ち上がってポケットに両手を突っ込む。そして由美子の顔を見つめる。

「ココロを『殺す』ことだつてできる。そうすれば、報われるんじゃないか？」

「むく……われる」

それは、悪魔の誘惑だった。

由美子にとって、刺激的な果実。それを蓮は彼女の目前でちらつかせる。

「もちろん足はつかない。バレることなく、殺せる」

更に彼女を後押しする。すると、由美子は再び黙って考え込んでしまった。そして蓮が話すこともなく、再び息の詰まるような静寂が部屋を包む。波の音は打って変わって由美子の心をかき乱す「障害」となっていた。

蓮からの甘い誘惑……恥ずかしながら、由美子はそれをとても魅力的だと感じていた。そう、自分と大切な母親の人生を滅茶苦茶にしたあの男を苦しめることができる。

「殺す」ことができる。

「返事を待つてる……明日まで」

それだけ告げると、蓮は独りで由美子の部屋から出て行ってしまった。取り残された由美子は、再びベッドに仰向けに寝ると、思考に耽る。

\$\$\$\$\$\$\$\$

由美子の部屋に忍び込んでから一日が経過し、学校での授業を終えた蓮はマキナと天音に取り囲まれていた。

「アブラカタバラ、アラブラカタバラ……？ アツラーカタバラ？」

マキナは謎の呪文を詠唱しながら、数独の本を読んでいる蓮の周りをピョンピョンと飛び回っている。

「——アツラーはイスラムの神だ」

そう突っ込みを入れると、蓮は読んでいた本をパタンと閉じて、ソファに深く腰掛けた。その隣で、ジリジリと天音が蓮ににじり寄ってくる。

「そう言えば、榊さん様子がおかしいのよ。蓮何か知らない？」

いや知らないと彼は白を切ると、跳ね回るマキナの頭を鷲掴みした。

「フギツ！ もー何すんのよささ」

「あんまり飛び回るな。机に脚を引っかけて転ぶぞ？」

「ウーイ」とマキナは不思議な返事をする、大人しくイスに腰かける。時間は五時、外出するにはもう遅い時間だった。なので、買い物しようと思っていた蓮は仕方なく諦めることにしたのだ。その代わり、暇つぶしとして数独パズルを片手に、寮のラウンジでくつろいでいた。

「あつ……」

突然マキナが素っ頓狂な声を上げる。

蓮はその声に釣られてマキナの視線の先を見た。そこには「関わるな」という禍々しいオーラを放つ由美子の姿があった。

「あ、榊さん。買い物？」

天音が気さくに話しかけるが、由美子は物凄い剣幕で彼女をキツと睨みつける。

「ご、ごめんなさい……余計なお世話よね」

「……いえ、いいの。気にしないで」

由美子はそれだけ言うと、何か考えているらしく難しい表情をしながらそそくさと自

室に向かつてしまった。丁度彼女が見えなくなったところで、天音はほっと一安心する。

「ふー、今日の紳さんは気が立ってるわね」

確かにと蓮は相槌を打つ。彼女がどうしてそうなっているのか、蓮は良く知っていた。そして、それが今日で終わるということも。

「さてと、俺は部屋に戻る」

「え〜？　じゃあ私もいこっかな？」

天音が頬を赤らめ、あからさまに胸を強調しながら蓮に上目遣いで尋ねる。

「ダメだ。今日はやらないといけないことがある」